

「働き方と生活についてのアンケート調査」の調査と結果の概要

小林 大祐*
仁愛大学人間学部

The outline and results of the“Survey on Work and Life 2012”

Daisuke KOBAYASHI
Faculty of Human Studies Jin-ai University

本稿は、筆者が2010年度から2012年度に掛けて、科学研究費若手（B）「若年非正規雇用層の階層的多様性についての計量的研究」（研究課題番号：22730419）の助成を受けて実施した、「働き方と生活についてのアンケート調査」について実査概要および、調査結果の一部について、その概要について報告するものである。分析の結果、従業上の地位のなかでも、非正規雇用の間の「本意」か「不本意」かの差異が意識面に大きな影響を与えていることが分かり、今後更に検証を進めていく必要があることが示された。

キーワード：若年非正規雇用、不本意型非正規

1 実査の概要

本稿は、2010年度から2012年度に掛けて、科学研究費若手（B）「若年非正規雇用層の階層的多様性についての計量的研究」（研究課題番号：22730419）の助成を受けて筆者が実施した、「働き方と生活についてのアンケート調査」について実査概要および、調査結果の一部について、その概要について報告するものである。

実査は、一般社団法人中央調査社（以下、中央調査社）に委託して実施した。想定母集団は、全国の23歳から39歳までの男女で、枠母集団（標本抽出枠）は、中央調査社のマスターサンプルを用いた。計画サンプルサイズは1200であり、抽出は地域ブロックと都市規模で層化したマスターサンプルのリストから、個人を等間隔で抽出することで行われた。

調査モードは、郵送とwebの逐次方式によるmixed-modeである。実施時期は、8月30日に事前挨拶状を送付、9月5日に調査票および返信用封筒を発送。そして、10月3日に配布した2回目の督促状において、web回答用のURLを記載し、webでも回答できるようにした。

有効回収数は620（うちwebでの回答は24）で、回収率は51.7%となり、これは若年層を対象とした

調査であること、そして実際に見積段階で調査会社から提示された回収率が30.0%であったことから考えると、優秀な値であると考えられる。

2 結果の概要

2.1 基本属性変数

男女比については、男性36%、女性64%とかなりの偏りが出ている。女性の比率が多くなる事は、郵送調査において顕著とされているが、今回もそのような傾向となった。このように性別に大きな偏りがある事から、単純集計も男女別に提示する事が望ましい。しかし、年齢については有意な差はみられない。

表 1-1 調査についての基本情報

1. 地域	全国（岩手、宮城、福島沿岸自治体は除く※）
2. 対象	23歳から39歳までの男女
3. 対象数	1200人
4. 調査方法	郵送とwebのmixed-mode（督促はがき2回目時にweb回答を可能にした逐次方式）
5. 実査時期	2012年9月
6. 有効回答数	620（51.7%）

※東日本大震災の影響を考慮したため

表 2-1 性別分布

	度数	%
男性	223	36.0
女性	397	64.0
合計	620	100

表 2-3 男女別現在の就業状況

	現在の就業状況				合計
	有職	無職 (仕事を探している)	無職 (仕事を探していない)	学生	
男性	202	10	3	7	222
	91.0	4.5	1.4	3.2	100.0
女性	279	36	78	4	397
	70.3	9.1	19.6	1.0	100.0
合計	481	46	81	11	619
	77.7	7.4	13.1	1.8	100.0

表 2-2 男女別年齢の平均

性別	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	t値
男性	223	32.97	4.695	0.314	-0.761
女性	397	33.27	4.751	0.238	

2.2 現職関連項目

調査時点での就業状況は表 2-3 の通りで、有職者は男性の 91.0%、女性の 70.3%である。平成 24 年「就業構造基本調査」では「25 歳～39 歳」の男性の有業率は 91.7%、女性の有業率は 69.8%なので、就業状況についての偏りはほとんど無いといえる。

また、従業上の地位、特に正規雇用、非正規雇用の比率について示したのが図 2-1 である。「民間企業で常時雇用されている一般従業者」「官公庁で常時雇用されている一般従業者」を足し合わせた「正規雇用」が有職者全体に占める割合は男性で 73.7%、女性で 42.3%。「臨時雇用、パート、アルバイト」「派遣社員、業務請負」「契約社員、嘱託社員」を足し合わせた「非正規雇用」が有職者全体に占める割合は男性 13.4%、女性で 46.2%となっている。就業構造基本調査の結果では、「25 歳～39 歳」の「正規の職員・従業員」が有業者に占める割合は男性で 78.4%、女性で 50.4%

となっており、男女とも 5 ポイントほど割合が少ない。ただし、「25 歳～39 歳」の「非正規の職員・従業員」が有業者に占める割合は男性で 13.8%、女性で 45.1%と本調査データと 1 ポイント程度の差である。これらの結果から、本調査データにおいて、母集団の代表性は担保されているとみなすことができるであろう。

2.3 正規雇用と非正規雇用の格差

正規雇用と非正規雇用の間の格差について確認する。ここでは、近年問題となっている非正規の高齢化に焦点を当てるために、年齢を 20 代と 30 代とに分けて個人年収と仕事満足度について比較を行った。なお、個人年収項目については各収入階級の間値を与えて量的変数として用いている。

表 2-4 の通り、非正規層の個人年収の平均額は、男女とも年齢階層に関わらず正規を下回っている。そし

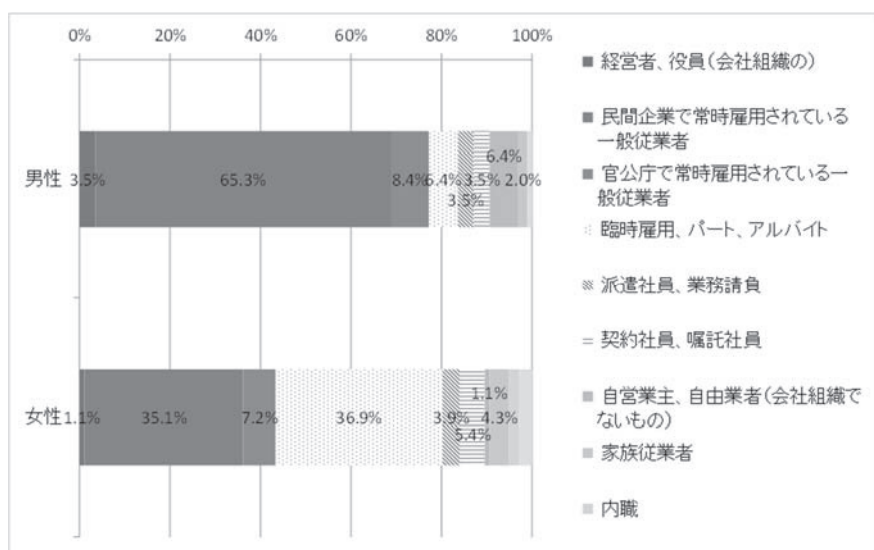


図 2-1 男女別従業上の地位

表 2-4 個人年収（実額化）の平均（単位：万円）

性別	世代2分類	正規・非正規	平均値	度数	標準偏差
男性	23-29	正規	298.0	25	139.4
		非正規	175.0	7	50.0
		合計	281.6	34	139.7
	30-39	正規	442.3	101	146.2
		非正規	231.3	12	105.1
		合計	413.1	135	169.9
	合計	正規	413.7	126	155.5
		非正規	210.5	19	91.4
		合計	386.7	169	172.2
女性	23-29	正規	276.8	41	96.1
		非正規	119.2	26	64.9
		合計	209.9	73	115.4
	30-39	正規	333.1	62	101.0
		非正規	112.6	85	66.0
		合計	199.4	168	144.2
	合計	正規	310.7	103	102.4
		非正規	114.2	111	65.5
		合計	202.6	241	135.9

表 2-5 男女別年齢階層別仕事満足度クロス集計表

性別	世代2分類		現在の仕事に満足している						合計
			とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらとも言えない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	該当しない	
男性	23-29	正規	5.4%	24.3%	29.7%	16.2%	10.8%	13.5%	37
		非正規	6.3%	12.5%	12.5%	12.5%	12.5%	43.8%	16
		合計	7.3%	21.8%	23.6%	14.5%	10.9%	21.8%	55
	30-39	正規	9.8%	33.6%	25.4%	18.9%	5.7%	6.6%	122
		非正規	0.0%	11.1%	33.3%	38.9%	16.7%	0.0%	18
		合計	10.3%	30.3%	27.3%	20.6%	6.1%	5.5%	165
	合計	正規	8.8%	31.4%	26.4%	18.2%	6.9%	8.2%	159
		非正規	2.9%	11.8%	23.5%	26.5%	14.7%	20.6%	34
		合計	9.5%	28.2%	26.4%	19.1%	7.3%	9.5%	220
女性	23-29	正規	14.0%	35.1%	22.8%	8.8%	1.8%	17.5%	57
		非正規	3.1%	28.1%	34.4%	15.6%	15.6%	3.1%	32
		合計	11.3%	32.0%	26.8%	12.4%	6.2%	11.3%	97
	30-39	正規	6.3%	14.3%	13.7%	5.1%	1.7%	58.9%	175
		非正規	15.2%	30.3%	25.3%	21.2%	5.1%	3.0%	99
		合計	9.1%	20.8%	18.8%	12.8%	3.0%	35.6%	298
	合計	正規	8.2%	19.4%	15.9%	6.0%	1.7%	48.7%	232
		非正規	12.2%	29.8%	27.5%	19.8%	7.6%	3.1%	131
		合計	9.6%	23.5%	20.8%	12.7%	3.8%	29.6%	395

て、20代では100～150万程度の差だったものが、30代になると200万以上になり、今回のデータからも年齢を経ることで、正規と非正規との格差は拡大することが確認できる。

では、正規層、非正規層は自分の仕事にどれだけ満足しているのだろうか。それを、やはり年代別にクロス集計表で見たのが表2-5である。「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」を足し合わせた値は、男性の「23-29」の正規で29.7%、非正規で18.8%と

10.9ポイントの開きがあるが、これが「30-39」では、正規で43.4%と増加しているのに対し、非正規では11.1%と減少し、両者の開きは32.3ポイントにまで拡大している。非正規のケース数が少ないため、結果の解釈には慎重であるべきであるが、この傾向には年収の格差がダイレクトに反映しているようにみえる。

しかし、女性サンプルにおいては異なった傾向がみられた。「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」を足し合わせた値は、「23-29」の正規で49.1%、非

表 2-6 男女別非正規雇用で働く理由

	男性		女性		全体	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
仕事以外にしたいことがあるから	0	0.0%	7	5.5%	7	4.5%
つきたい仕事のための勉強や準備、修行期間として	2	7.4%	12	9.4%	14	9%
自分に合う仕事を見つけるため	4	14.8%	3	2.3%	7	4.5%
正社員として採用されないから	13	48.1%	22	17.2%	35	22.6%
学費稼ぎなど、生活のために一時的に働く必要があるから	2	7.4%	13	10.2%	15	9.7%
なんとなく	4	14.8%	7	5.5%	11	7.1%
正社員はいやだから	0	0.0%	3	2.3%	3	1.9%
家庭の事情で	0	0.0%	38	29.7%	38	24.5%
自由な働き方をしたいから	2	7.4%	10	7.8%	12	7.7%
その他	0	0.0%	13	10.2%	13	8.4%
合計	27	100%	128	100%	155	100%

表 2-7 本意不本意別個人収入（実額化）平均の比較（単位：万円）

性別		平均値	度数	標準偏差
男性	本意非正規	207.5	10	72.7
	不本意非正規	213.9	9	113.3
	合計	210.5	19	91.4
女性	本意非正規	106.9	90	63.4
	不本意非正規	141.3	20	66.0
	合計	113.2	110	64.9

正規で31.2%と20ポイント近く正規層で高くなっているが、「30-39」においては正規で20.6%、非正規で45.5%と逆転しているのである。これは女性の非正規には、いわゆる「主婦パート」のような自発的に非正規を選択する層がより多く含まれ、それが30代でより増加するためであると考えられる。

このような傾向が意味するのは、非正規雇用層のなかにも、自発的にそのような従業上の地位にとどまる層と不本意にもそのような立場に滞留せざるを得ない層があり、これらの差異は無視できないものであるということである。したがって、次の分析では非正規雇用の中の差異に注目する。

2.4 非正規雇用内の格差

非正規雇用層を「本意型」か「不本意型」かに分類する為に用いるのが、非正規雇用で働く理由である。脇坂（2003）や山本（2011）に倣い、非正規雇用で働く理由として「正社員として採用されないから」と回答した層を「不本意型非正規」とすると、男性非正規の48.1%、女性非正規の17.2%、計非正規の22.6%を占めることになる（表2-6）。山本（2011）は、『慶應義塾家計パネル調査』の個票データを用い、

非正規雇用の13.8%が「不本意型」と推定しており、本調査の値に比べ少ないが、これはこの分析の対象が民間企業に勤める54歳以下の男女となっており、本調査データに比べ、高年齢層が多く含まれていることによると考えられる。

では、「本意型」と「不本意型」ではどのような違いがあるのだろうか。まず個人年収で比較したのが、表2-7である。非正規雇用を更に細分化しているため、ケース数がかかなり小さくなっているが、男女とも「本意型」より「不本意型」の収入が高い傾向が見て取れる。本調査には労働時間についての質問が含まれていないので推測するよりないが、この傾向には労働時間の違いが影響していると思われる。なぜなら、正規雇用を希望しているということは、フルタイムとして働く用意があるということであり、そのような層は実際にフルタイムに近い時間働いていると考えられるからである。

これは見方を変えれば、「不本意型」は、フルタイムで働くなくてはならない状況にある可能性を示唆する。そこで、「世帯収入」について比較すると、「不本意型」の世帯収入は本意型よりも低く、「無職（仕事を探している）」に次ぐ水準であることが分かった（図2-2）。

「働き方と生活についてのアンケート調査」の調査と結果の概要

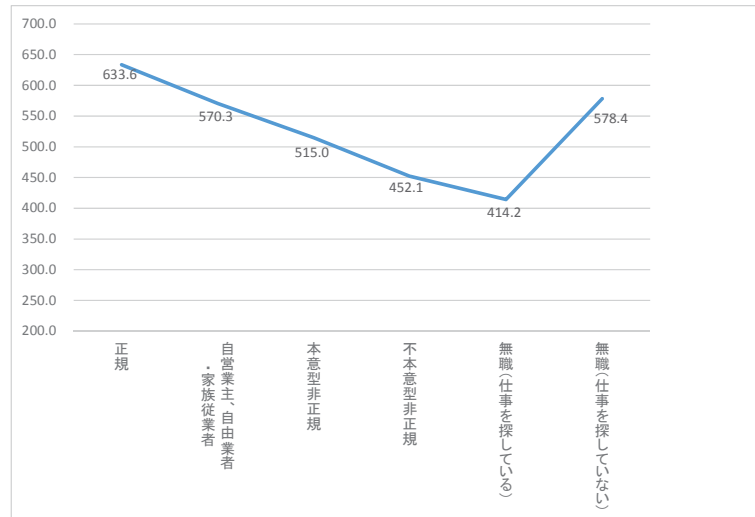


図 2-2 従業上の地位（無業者を含む）別、世帯収入（実額化）の平均（単位：万円）（ $F=5.89^{***}$ ）

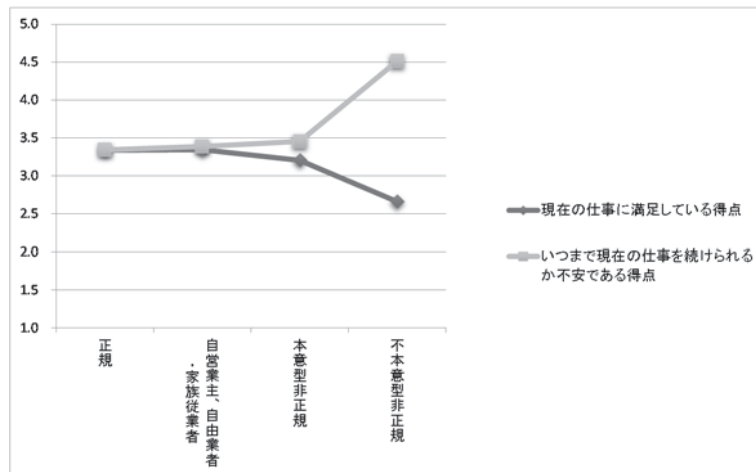


図 2-3 従業上の地位別、現在の仕事満足度の平均（ $F=4.07^{**}$ ）、およびいつまで現在の仕事を続けられるか不安の平均（ $F=9.80^{***}$ ）

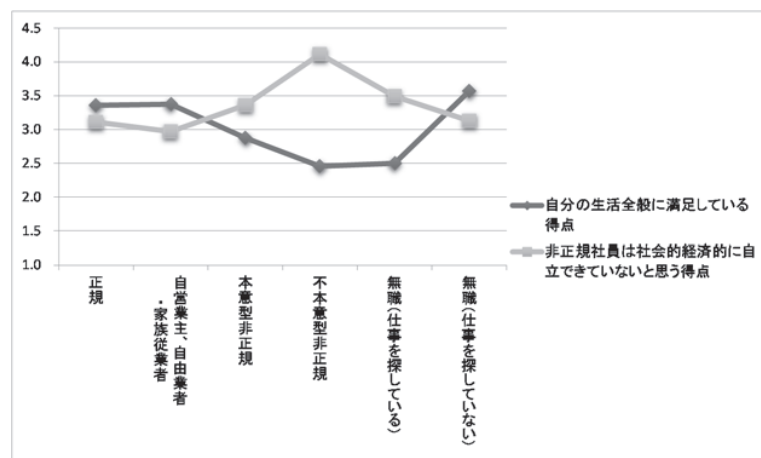


図 2-4 従業上の地位（含無業者）別、生活満足度得点の平均（ $F=13.88^{***}$ ）および非正規社員は社会経済的に自立できていない度合いの平均（ $F=6.65^{***}$ ）

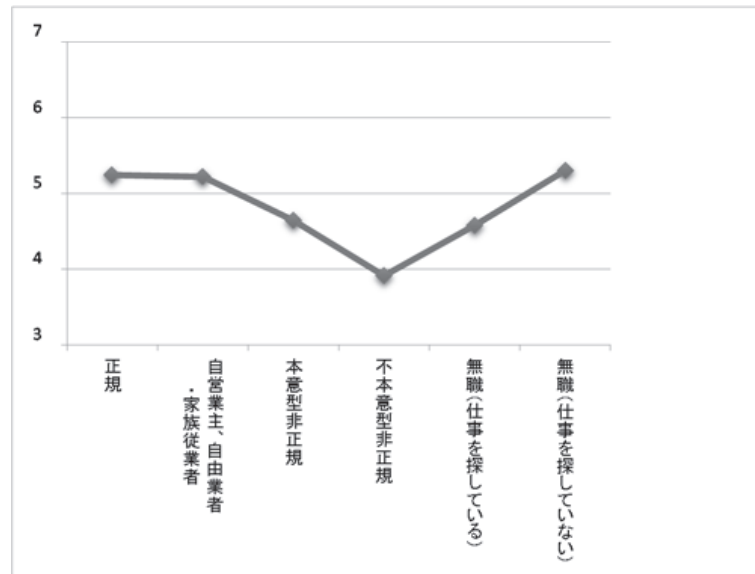


図 2-5 従業上の地位 (含無業者) 別、10 段階階層帰属意識 ($F=6.66^{***}$)

このような層において、非正規にとどまらざるを得ないことは、仕事に対する満足感にも影響する。図 2-3 は「現在の仕事に満足している」および「いつまで現在の仕事を続けられるか不安である」という意見に対し、自身がどの程度あてはまるのかを 5 段階で回答してもらったものを得点化し、その平均を従業上の地位で比較したものである。「本意型」の傾向が正規とほぼ同じなのと比べ、「不本意型」は「現在の仕事に満足している」度合いは低く、「いつまで現在の仕事を続けられるか不安である」度合いは高いという、他のカテゴリーとは明確に異なった傾向が見られるのである。

そして、意識に対する影響は、仕事面に限らない。図 2-4 は、「自分の生活に満足している」および「非正規社員は社会的経済的に自立できていない」という意見に対する賛否を 5 段階で回答してもらったものを得点化し、その平均を示したものである。ここからは、不本意型の生活に満足している度合いが「無職 (仕事を探している)」と並んで最低水準であり、主観的厚生という面においても「本意型」非正規とは差が見られている。そして、非正規社員が自立できていないと感じる度合いも「不本意型」で最も高く、同じ非正規という立場にありながら、「本意型」よりも明確に低いのである。最後に、10 段階階層帰属意識の平均を比較したのが図 2-5 である。ここでも、「不本意型」は「無職 (仕事を探している)」よりも低い水準にあ

ることが確認できる。このような傾向からも、「本意型」と「不本意型」の間には、意識面での大きなギャップが存在すると言えるであろう。

3 まとめ

本稿は、「働き方と生活についてのアンケート調査」について実査概要および、調査結果の一部について、その概要について報告するものである。分析の結果、従業上の地位のなかでも、非正規雇用の間の「本意」か「不本意」かの差異が意識面に大きな影響を与えていることが分かった。山本 (2011) は、「本意型」と「不本意型」の意識面の差異を見出した上で、「不本意型」は失業との類似性が高いことを明らかにしたが、本稿においても仕事に関する意識や階層意識、そして、生活満足感で表される主観的厚生において、「不本意型」は「本意型」よりも低い水準にあり、失業者により近い傾向にあることが確認された。このような結果は、とかく一括りにされてしまわれがちな、若年非正規雇用層の間に明確な断絶が存在しており、労働市場におけるミスマッチの影響をどのような人びとが被っているのか、厳密に検討していくためには、本稿のような本意か不本意かという側面が、非常に大きな意味を持っていることを示すものである。

本稿の目的は、調査の概略と分析結果の大まかな内容を示すことであったため、2 変数間の関連の単純な

分析のみが用いられた。しかし、当然ながら学歴や職業内容などの客観変数が交絡している可能性はある。したがって、今後はこれらの変数を統制した多変量解析によって、更に検証を進めていく必要があるだろう。

謝 辞

本研究は、科研費(25380646)(22730419)(25285147)(23223002)の助成による研究成果の一部である。調査におけるweb回答には、放送大学ICT活用・遠隔教育センターが運営する、リアルタイム評価支援システムREAS(Realtime Evaluation Assistance System)を用いた。

[<https://reas2.code.ouj.ac.jp/cgi-bin/WebObjects/topssl>]

また、本調査にご協力頂いた調査対象者の方々にも、厚く御礼申し上げたい。

参考文献

脇坂明, 2003, 「パートタイマーの正社員への変更希望」日本労働研究機構『非典型雇用労働者の多様な就業実態: 「就業形態の多様化に関する総合実態調査」等による実証分析』調査研究報告書 No.158: 76-103.

山本勲, 2011, 「非正規雇用者の希望と現実: 不本意型非正規雇用の実態」鶴・樋口・水町編『非正規雇用改革: 日本の働き方をいかに変えるか』日本評論社.

SUMMARY

In this paper, I reported the outline and the results of the survey I carried out in 2012, supported by the Grants-in-Aid for Young Scientists (B), JSPS. The results show that there is gap social consciousness between voluntary non-regular workers and involuntary non-regular workers...

KEYWORDS: involuntary non-regular workers, social consciousness

